

「喚くふしだらな女たち」 イギリス革命期の女性の行為主体性を概念化する

著者	アン・ヒューズ, 後藤 はる美(訳)
著者別名	Ann HUGHES
雑誌名	東洋大学人間科学総合研究所紀要
巻	22号別冊
ページ	135-146
発行年	2019-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011429/



「喚くふしだらな女たち」 —イギリス革命期の女性の行為主体性を概念化する—*

アン・ヒューズ** (後藤 はる美訳***)

1645年4月、イースト・ロンドンの職人の娘アナ・トラプネルは、コーンウォール当局に捕縛され、ロンドンに送還された。そして、護国卿政府の国務評議会は彼女をブライドウェルに収監するよう命じた。ブライドウェルは「無秩序な貧民」や浮浪者、盗人、乞食、娼婦を罰するためのロンドンの監獄であった。そこで彼女は婦人看守に「喚くふしだらな女たち a company of ranting sluts」の一人として非難された。「ふしだらな女」は性的不品行を暗示し、「喚く」は不適切で逸脱的な言説と、不道德で異端の宗教団体である「ランター」との関連性の両方を示すものだった。トラプネルは数ヶ月間そこに留まった。その間ブライドウェルは「ハナ・トラプネルに日々会いにくる多くの人」に悩まされる一方で、彼女の支持者たちが彼女の著作の出版を企画して彼女の拘禁を非難したため、彼女は「全国の見世物」となった。また、彼らは暗示されたブライドウェルの「ひどいスキャンダル」から彼女を守ろうとした¹。

アナ・トラプネルは、いかにしてこのような悪評を獲得したのだろうか？1654年1月には多くの男女がホワイトホールに押しかけ、彼女の劇的な予言を聞いた。トラプネルはヴァヴァソール・パウエルの裁判に出席中、トランス状態に陥った。パウエルは聖職者で、1653年12月以来、国務評議会とともにイングランド、ウェールズ、アイルランド、スコットランドの支配者となったオリヴァ・クロムウェルの護国卿政府に反対した人物である。ほぼ2週間、トラプネルは床を離れず、ほとんど飲み食いせず、「インスピレーションによる、並外れて不思議に満ちた…支配者、軍隊、教会、政府、大学と全ネーションに関係する神のヴィジョン」について口にするときを除いて、明らかに無感覚

* 本稿は主に筆者の以下の研究に依拠している。Ann Hughes, *Gender and the English Revolution* (London: Routledge, 2012); do., “‘Not Gideon of Old’: Anna Trapnel and Oliver Cromwell”, *Cromwelliana* (2005), pp. 77-96.

** イギリス・キール大学(名誉教授)

*** 人間科学総合研究所研究員・東洋大学文学部

¹ *Calendar of State Papers Domestic*, 1654, p. 197; Bridewell Records, Microfilm of Governors minutes; および Paul Griffiths による情報にもとづく。Anna Trapnel, *A Legacy for Saints, Being Several Experiences of the Dealings of God with Anna Trapnel* [以下、*A Legacy for Saints*と略す] (London, 1654)の前書きは、トラプネルのロンドンの会衆の長老(elders)によるものであり、トラプネルがランターと対立していたことが主張されている。

だった²。トラプネルは、パウエルと同様、第五王国派の著名な支持者だった。同派は急進的な千年王国論者の集団で、1650年代初めのイングランド政治におけるかなりの勢力だった。〔第五王国派という〕彼らの名は、旧約聖書のダニエル書第7章と第8章にある予言から取られたものだ。予言者ダニエルがバビロン王ベルシャザルに、彼が見た4匹の大きな角をもつ獣の夢の意義について説明する箇所だ。これらの獣はその後、地上を支配することになる。獣たちは4人の偉大な王であり、第四の獣が倒れたとき「いと高き者の聖者が国を受け、永遠にその国を保って、世々かぎりなく続く」(ダニエル書第7章18節)。17世紀の千年王国論者は、ダニエル書と新約聖書の黙示録に着想をえて、4匹の獣は世界の四つの主要な王国であり、第四(おそらくハプスブルク帝国)が崩壊寸前にあって、今まさに「第五王国」へと導かれようとしている——すなわちイエス・キリストが再臨し、聖者ととともにこの世を千年にわたって支配する、とみなした。千年王国到来への期待は近世イングランドに広くみられたが、それはチャールズ1世と彼の息子の軍隊に議会軍が連勝したことや、前例のない1649年のチャールズ1世の裁判と処刑によって強められた。オリヴァ・クロムウェルを含む多くが、これらの動乱は世界が最終段階へと入りつつある符号であり、神が人びととともに、また人びとのために偉業を成しているのだと考えた。ほとんどの人がクロムウェルのように、キリストの再臨についてかなり不特定かつ楽観的で理論的な考えを抱いていた。第五王国派を他と明確に区別したのは、聖者による支配を確立し、キリスト以外のいかなる王も戴かないようにするための政治運動への実践的献身であった。

その結果、第五王国派は確立して間もない護国卿政府に対する、決意に満ちた危険な敵となった。彼らはとりわけ、議会派の大義を裏切ったとしてクロムウェルを弾劾した。彼らの幻滅は、1653年のランプ議会解散〔4月〕と護国卿議会設立〔12月〕のあいだの「空位期」に、オリヴァ・クロムウェルと軍部が用いた指名議会(「ベアボーン」議会)が聖者による支配の開始を意図している、と誤って想定したことでいっそう深まった³。トラプネルのヴィジョンの多くは、ダニエル書の言葉に依拠しつつ護国卿を直に攻撃するものだった。「獣の大軍を連れており…彼らの顔と頭は男のようで、頭のどちら側かに角をもっていた。最前列のものは完全にオリヴァ・クロムウェルのような顔つきで…彼に続くものたちは…彼が彼らの首領であることに大きな歓喜を表して地面から飛び上がり…こびへつらった…。彼は彼の道に立ちはだかる多くの尊い聖者たちを蹴散らした」⁴。神の「端女handmaid」の一人として、トラプネルはクロムウェルに「墮落」を悔い改め、「この世のすべての王国は坂道を転がり落ちる」ことを認めるよう説いた⁵。現代の読者のために強調する必要があるのは、トラプネルがヒステリックで精神不安定な女性でも、風変わりな過激派の一員でもなく、新体制

² Anna Trapnel, *The Cry of a Stone* (1654)〔以下、*Cry of a Stone* と略す〕, Hilary Hinds, editor (Tempe, Arizona, 2000)の表紙より。引用はすべてこの版にもとづく。

³ Bernard Capp, *The Fifth Monarchy Men. A Study on Seventeenth-century Millenarianism* (London, 1972); Austin Woolrych, *Commonwealth to Protectorate* (Oxford, 1982)が、この政治的コンテクストを提供してくれる。

⁴ Trapnel, *Cry of a Stone*, p. 15.

⁵ Trapnel, *Cry of a Stone*, pp. 21-23.

の深刻な脅威となったネットワークの指導的な参加者であったことである。彼女と仲間たちは彼女の予言を広めるために印刷物を戦略的に使い、トラブネルはホワイトホールでの人気を基盤に、元ベアボーン議会議員も含んだ地元の「聖者」の支援のもとで西部諸州への説教／予言ツアーに向かったのだった。マーチモント・ニーダム——政府支援による指導的なニュース冊子『メルキュリウス・ポリテイクス *Mercurius Politicus*』の編者にして「通報者 *intelligencer*」——は、クロムウェルに以下のように報告した。いわく、トラブネルは「ロンドンで害悪をまき散らしており、地方でも同じようにするだろう」。コーンウォールでは彼女は監視のもとにあり、地元の治安判事の審問を受け、そして私たちがすでにみたように、最終的に罰せられた。

現代の研究者が主張するように、アナ・トラブネルは「17世紀イングランドの党派的動乱のなかで出現した、最も重要な公的で政治的な女性の一人」であった⁶。彼女は公事にインパクトを与えた独身女性として際立っており、おそらくはイングランド革命において全国的な影響力を行使した最も低い社会的地位の女性であった。彼女は、名は挙げられないものの、トマス・ホップズにも記憶された。ホップズは、政治的安定に対する予言と他の形態の宗教的情熱の危険を示すために、コーンウォールで活躍する「予知夢とヴィジョンで人気を博し、多くに耳を傾けられた」女性として彼女を想起したのである⁷。私はこのように彼女を政治および宗教上の明確なコンテキストに位置づけることから始めた——すなわち、元同盟者間の内部批判のみならず、多くの敵に対峙した護国卿政権の最初の数ヵ月における、第五王国派の運動家としての位置づけである。しかし、既存の政治史に女性の体験をそのままただ付け加えることはできない。一つだけ重要な違いを指摘しよう。当局は、男性の第五王国派の指導者を政治的なアクターとして扱い、ウィンザー城や他の政治監獄に収容したのに対して、彼らはトラブネルを単に秩序を乱す女性と判断し、彼女をまるで娼婦か、単に家父長的支配を逸脱した女性の一人のように処罰した。トラブネルの公的なキャリアは、劇的な政治および宗教動乱の時代における女性の行為主体性（agency）の劇的な可能性と同時に、社会における女性の地位についての基本前提を逸脱して活動した、あらゆる女性の脆さを示している。

本稿の残りの部分では、アナ・トラブネルを焦点として用い、イングランド革命において女性が果たした役割を最もよく説明する方法は何かを論じたい。その際、彼女と他の活動的な女性とを適宜比較する。女性の行為主体性をコンテキストのなかで理解するには、近世イングランドにおける男女の役割の性質に関する既存の構造および前提と、確立した、ジェンダー化されたヒエラルキー（gendered hierarchy）を考察せねばならない。私は、[男女の性差の問題自体を扱うジェンダー史に対して]ジェンダー化の視角を取り入れた歴史（a gendered history）は方法論として必然的に領域横断的であると主張する——トラブネルの公的介入のためにすでに素描した宗教や政治の展開と、経済、社会、文化の歴史からの洞察とを総合する必要がある。

1640年代および50年代におけるイングランド革命についてのより広いコンテキストもいづらか必

⁶ James Holstun, *Ehud's Dagger. Class Struggle in the English Revolution* (London, 2000), p. 162.

⁷ Hobbes, *Behemoth*. 引用は、Holstun, *Ehud's Dagger*, p. 301 による。

要である。本稿はイングランド中心主義だが、もちろん、17世紀半ばのアイルランドとブリテン諸島の諸戦争が、チャールズ1世の三王国と（ウェールズ人とコーンウォール人をアイルランド人、スコットランド人、イングランド人に加えた）五つのネーションのすべてを震撼させたことは承知している。これらの戦争は、命の大喪失、重大な経済混乱と多くの苦難を招いた。1650年代初頭におけるイングランドによるスコットランドの征服と、とりわけアイルランドの征服は、最もドラスティックで痛ましい収奪と破壊、死をもたらした。しかし、イングランド自体においても、少なくとも10人に1人の男性が軍役に従事し、戦闘と行軍中に広まった病気による死亡率は、1914～18年の第一次大戦中のそれよりも人口に比して高かったと見積もられている。イングランドにおいて、議会派政府の人口への影響は、軍国化と重税および非公式の損害を通じて強まった。戦争の圧力と王権の崩壊による真空下での思想上の動乱は、政治的、宗教的細分化と議会派の急進化を助長した。公には国教会(national church)を改革し、王を「悪しき顧問」から遠ざけるために始められた戦争は、包括的な国教会の崩壊と、ほとんどのプロテスタントに対する宗教的自由、人民に対して犯された罪によるチャールズ1世の裁判と処刑、そして、「人民」は神のもとであらゆる正義の源であるという議会の公式声明に帰結した。

近世イングランドにおいて女性の不平等と従属、彼女たちの男性への服従は社会と政治の安定の基本だとみなされていた。これは神が与えた秩序の理解であった。創世におけるイヴの役割から新約聖書のパウロの教えまで、キリスト教の正典は女性の劣等性の正当化の主要な根拠となっていた。両性に関する医学的理解は学術的な論文と民衆文化において流布したが、そのどちらもが、女性はより脆弱で合理的でない性であり、男性よりも自制を失いやすく、したがって他者を支配し、政治的権威をもつには不適切であると説いた。とはいえ女性は、部分的には内戦の空前の動乱に刺激されて、世紀半ばの抗争において積極的な役割を果たした。また、女性の行動力アクティビズムは女性の劣等性には限界があったことや、伝統的なジェンダー関係の理解には矛盾があることも示している。最も意義深い矛盾のうち二つを指摘しよう。あらゆる社会層において、結婚した夫婦を筆頭とする世帯は近世イングランドにおける極めて重要な経済的、社会的、政治的単位であった。これらの世帯内で、妻は下位ではあっても重要な協力者であり、夫が不在あるいは資格を喪失した際には介入することができた。完全に虐げられた妻は、男性にとってもほぼ無益で、活動的で有能な女性は、貴族世帯でも小家族企業でも、それが上手く機能するために不可欠だった。したがって、男女関係には支配と同じく相互依存の要素があったのである。同様に、キリスト教の根本的要素に疑義が付され、個々人の魂の状態が重要であった宗教改革以降の社会において、男性は信仰に対しても、彼の妻や娘、奉公人に対しても究極的な権威をもたなかった。女性や社会的に劣位にある者が、神に従うか現世の上位者の命令を受け入れるかを選ばざるをえない、というジレンマが発生したことは十分にありそうだ。

1640年代と1650年代に、イングランド女性は実践面で活動的であり、スパイや王党派/議会派の使者として活動し、あるいは包囲された家を守り、町の要塞を築く手伝いをした。彼女らは新しい宗教セクトにおいて顕著であり、個人的な家族の問題に関して、あるいは集団的な政治問題に関して、

ロビー活動や嘆願を行った。これらの女性たちはあらゆる社会層出身者を含み、チャールズ1世の外国人にしてカトリックの妃ヘンリエッタ・マリアから、アナ・トラプネルのような慎ましい出自の者までいた。上述のように、トラプネルは宗教的なインスピレーションを得たと主張していた。これはイングランド革命期の女性による公的活動の二つの最も一般的な正当化の根拠の一つである。そしてこの正当化はある程度までは効果的だった。なぜなら、イングランドの男女は神の摂理に支配される世界に生きているという共有された前提と、とりわけ議会派のあいだにみられた、彼らは神の大義のために戦っているという確信があったからだ。トラプネルは、インスピレーションを得て予言を行う、かなり多くの女性のうち最も重要な、あるいは悪評高い人物だった。これらの予言を行う女性の多くは、クエーカー教徒としてめざましく活躍した者だった。同派は革命期に出現した、最も重要で長命なセクトである⁸。以下でさらにみるように、予言はおそらく曖昧な形の主体的行為といえるだろう。女性は国教会への参加を否定する新しい自発的な宗教集会において数の上でも顕著だった。たとえば、ブリストルにおけるブロードミード会衆派は4人の男性と1人の女性によって1640年代前半に設立されたが、1660年までにその会員の半数以上が女性になった⁹。原則としてあらゆる宗教集会は、女性は宗派加入の選択を自身で行うべきだという点は認めたものの、女性の従属という伝統的な価値観をもっていた。そして実際に、多くの宗教セクトは反抗的な女性や女性の参加をめぐる分裂に悩まされた。

女性の行動力アクティビズムのもう一つの一般的な正当化は、彼女たちの介入が防御のためであった、というものである——極端な状況下で、男性不在の家と家族のために、あるいは、戦争と政治的失墜のなかで。活動は戦争への直接参加も含んでおり、たとえば、貴族女性が敵に襲撃された家々を守るために防衛軍を組織した。王妃ヘンリエッタ・マリアが宮廷や外国とのあいだでめぐらした策略は、究極的には王家にほとんど利をもたらしなかったが、王党派のエリート女性は、敗戦した王党派に課された財政的な刑罰を軽減すべく議会派当局に嘆願し、より成功をおさめた。後述するように、より貧しい女性たちは、議会派の軍役中に夫が障害を残す重傷を負い、あるいは殺されたとき、家族の支援を求めて当局に決然と嘆願した。王政復古後には王党派女性によって類似の努力がなされた。女性たちはロンドンを拠点とした民主主義的運動にも関与した。これは、通常「レベラーズ（平等派）」と彼らの敵から呼ばれた集団で、およそ伝統的な自らの家庭への関心から離れ、当時最も確固とした女性の集団的要求を行った女性たちである。トラプネル同様、レベラーズの女性たちは、男性に対し女性の政治的権利を要求したのではなく、仲間の男性と共有する大義を、彼女たちも支援する権利があると主張した点を強調することは重要である。1649年に新しい共和国を攻撃して、イングランド人に単に「新たな鎖」を課しただけだとレベラーズが述べたとき、4人の男性指導者たちは当局に拘禁され

⁸ 女性による予言全般については、以下を参照。Phyllis Mack, *Visionary Women: Ecstatic Prophecy in Seventeenth-Century England* (Berkeley and Los Angeles, 1994). クエーカーについては以下を参照。Catie Gill, *Women in the Seventeenth-Century Quaker Community* (Aldershot, 2005). 厳格なカルヴァン派として、トラプネルはクエーカー教徒の女性を認めなかった。

⁹ Roger Hayden (ed.) *Records of a Church of Christ in Bristol, 1640-1687* (Bristol Record Society, 27, 1974).

た。女性たちは彼らの釈放を求めて嘆願書を組織し、たとえ常に首尾一貫してはいなかったとしても、決然と正当化の議論を展開した。彼女たちの言葉は、女性の弱さの強調と家庭に対する責任への関心を結びつけたものだった。女性のイニシアティブが正当化されたのは、この空前の危機においてのみだった。すなわち、議会に嘆願することは女性の「慣習」に反していたが、彼女らは「試練にあまりに打ちめられていたので」通常の領域に留まることができなかった。もし抑圧が賢い男性を狂気に走らせたと言うのなら、「より弱き器である私たちに、それ以上をどう求めると言うのでしょうか？」と。しかし、聖書とイギリス史の事例に依拠したより積極的な正当化も存在した。それにはアナ・トラペネルによる予言者の役割の正当化とも一定の類似性がある。「私たちの励ましと模範となるよう、神は複数のネーションに対し、時代々々に、女性の弱き手によって多くの救済をもたらした」。彼女たちは、旧約聖書のデボラとヤエルからヴァイキングに抵抗したアングロ・サクソンの女性たち、1637年のチャールズ1世の宗教政策に対して闘争を始めたスコットランド女性たちの事例にまで訴えた。そして、彼女たちの嘆願書を議会が侮辱的に却下して「お前たちの嘆願する問題は、お前たちが理解するよりも高次の関心事である…家に帰っておのれの仕事と家事に専念せよ」と述べたとき、彼女たちは驚くべき政治的主張をもって応答した。「われわれは、権利の請願〔1628年に通過した、王の専制的権力に対する措置を定めたもの〕にある自由と安全と、地上における他の善き法において、このネーションの男性と同等の利害をもつものではなかったか?」¹⁰。

より弱き器としての自らの弱さを主張する一方で、当局に対して確固とした反抗をみせるレベラーズの女性の集団的行動の正当化の複雑さは、予言者としてのトラペネルの個人的な行為主体性の曖昧さと比較可能である。トラペネルは彼女自身の行為主体性を主張しているのではない、と論ずることもできるだろう。トランス状態にあり、明らかに無感覚で、かつ自分自身の言葉を述べていると主張せず、神のメッセージを伝える道具として行動している場合に、それを女性の行為主体性ということができようか? もちろん、トラペネルに公的影響力を与えたのは、とりわけ内戦と国王転覆の混乱にあり、神が人びとに直接に語り掛けるかもしれないと信じる文化において、彼女が神の使者であるという確信、あるいは少なくともその可能性であった。実際に神は、弱く受動的な女性のように、この世の弱く軽蔑される者たちを彼の道具に選ぶことによってこそ、まさに彼の力を示そうとするかもしれない。トラペネルは有名な聖書の一節、ヨエル書第2章29～30節の、神は「わが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたの息子、娘は予言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちはビジョンを見る。その日わたしはまた、わが霊を僕、端女に注ぐ」とくに参照した¹¹。トラペネルがトランス状態にあったとき、彼女の言葉は直接に表現されたというよりも、彼女を見た者たちによって報告された。これは彼女のホワイトホールでのビジョンの例でも同様で、そ

¹⁰ 以下にもとづく。Ann Hughes, 'Gender and Politics in Leveller Literature' in Susan Amussen and Mark Kishlansky, eds. *Political Culture and Cultural Politics in Early Modern England* (Manchester, 1995).

¹¹ コリント人への手紙1、第1章27～28節の「神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び…」も参照。

のときは、彼女が「断片的に口にした表現」から「報告者 *relator*」が何とか意味を解して提示したのだった。トラプネルは折にふれ、自らは「弱く、価値のない存在」であり、彼女の言葉や行動はすべて神からもたらされたと主張した¹²。

しかしながら私は、トラプネルは行為主体性を行使しているとみるべきであり、それは近世イングランドの女性が置かれた長期的なコンテキスト、すなわち戦争と革命によって変貌したコンテキストにおいて理解できると指摘したい。まず、経済史と社会史の側面に目を向けることで、トラプネルの社会的、経済的自立性の意義を強調しよう。トラプネルは控えめな、しかし自給自足的な家庭の出身である。彼女は父親についてはほとんど述べないが、母親は彼女の自己形成に影響を与えた——「私は母が死ぬまで約 20 年間、彼女とともに暮らしました。その後は、母が私に残した資産と家を維持しました」。この経済的保障は、彼女がロンドンの急進的会衆派の活動的なメンバーとなり、第五王国派の大義のために旅することを可能にした。彼女は経済的に議会に貢献できる自身の能力を誇りにしており、このことは彼女が議会派の大義と自らを重ね、彼女の政治介入を正当化するすべの一つともなっていた。トラプネルいわく、「当時、戦場で戦っていた軍の維持費のために税を払いました。これを私は嫌々ではなく、自由にすすんで行き、皿や指輪を売ってその金を公的利用のために寄付しました」¹³。娘に継承されたトラプネルの母親の経済力は異例のものではない。ジュディス・ベネットが結論したように、ほとんどの時代の女性労働は「低地位、低賃金、低熟練」のもので、特定の都市的職業に対する女性の参入の制限は高まりつつあったが、アレクサンドラ・シェパード、ジェーン・ウィトルおよびマーク・ヘイルウッドが近年の研究で示したように、女性は独身でも既婚でも、農業、製造業——とりわけ繊維業——や、「草の根レベルの近世の商業」に相当従事していた。女性は世帯に対して重要な貢献を行っており、彼女たちの経済力が男性より低かったとしても、それらは必ずしも無視できるレベルではなかった¹⁴。トラプネルのような巡回するクエーカー教徒の女説教師が何らかの控えめな資源をもっていた一方で、救済を求めるより貧しい女性の嘆願もまた、よりよい時代の自身の経済的、財政的能力の経験に依拠していた。現在進行中の女性による嘆願のすばらしい研究プロジェクトから紹介する、極めて異なる二つの事例が、この社会経済的コンテキストをよく示してくれる¹⁵。ウェールズのデンビー州スタンスティ出身のジョン・バートの未亡人メアリ・バートンは、地元の治安判事に次のように嘆願した。「亡き夫は、議会派への善良なる愛情から家を離れ逃れることを余儀なくされました。…そのため、彼の家族と所領は無慈悲で残忍な敵に晒されました。その後、彼は（彼自身の良心に駆られて、また議会軍を支援すべく、彼のもてる能力の限界まで尽く

¹² Trapnel, *Cry of a Stone*, p. 38; たとえば、Anna Trapnel, *A Legacy for Saints*, p. 42.

¹³ Anna Trapnel, *Report and Plea, or A Narrative of Her Journey into Cornwall* [以下、*Report and Plea*と略す](London, 1654), p. 50.

¹⁴ Judith Bennett, *History Matters* (Manchester, 2006), Jane Whittle and Mark Hailwood, 'The Gender Division of Labour in Early Modern England', *Economic History Review* (forthcoming) における引用から。以下も参照。Alexandra Shepard, *Accounting for Oneself. Work, Status and the Social Order in Early Modern England* (Oxford, 2015).

¹⁵ civilwarpetitions.ac.uk

さんと)兵士に志願しました。その軍役中に彼は虜囚となり、拘束中に敵の残忍で野蛮な扱いによりシュルーズベリで亡くなりました。嘆願者は4人の小さな子供たちを残され、彼女が自らの誠実な労働によって得るもの以外、彼らを養育するためのいかなる手段ももちません。」彼女は、兵士の未亡人を支援する議会法に定められた救済を求め、その主張を7人の地元男性に承認させた。彼女の雄弁で判断に優れた訴えは成功した。これに対して、夫を地元の戦場で殺されたノッティンガム州の「貧しい未亡人」ウィニフレッド・バッジの言説は、より政治性は低く組み立てられていた。しかし彼女は、一兵卒として志願して以来、最終的に軍曹の地位につくまでの夫の給与の未払い分を慎重に積算した。彼女は、総計のほぼ半分はすでに支払われていることを認めたが、それは「負債のために、彼女の手に渡るやいなや」消え、「3人の子供とお腹の1人」を残された彼女には何も残されていないと言う。彼女は地元の委員会に「彼女と子供たちにミルクとその他の維持費を与える1~2頭の牝牛」を買う資金——言い換えれば、自給自足するためのいくばくかの援助——を求めた。これらは豊かなりソースをもつ女性の例である。彼女たちは自らの妻や母としての経験を、トラウマを残すほど変貌した環境下で用いたのであった。彼女らは、ほとんどがより慎ましい社会層の何千もの女性たちのなかにあり、夫の不在時に自らの家族を守ろうとして、有効に公的な行動を起こした者たちである。

バートンとバッジとは異なり、トラプネルは独身女性というより不確実な地位にあった。父親や夫、主人の権威のもとにない女性は、しばしば隣人や当局に疑わしいとみなされた。しかし、トラプネルが明らかに感じていたように、この自律性は長所にもなりえた。コーンウォルで治安判事は、彼女が「土地も生計も、知人もいない」コーンウォルにやって来た無作法を非難したが、彼女は次のように答えた。「私は独身です。なぜ私は、私の友人とどこにでもいてはいけないのでしょうか…なぜ私は、私が行きたいところに行けないのでしょうか——神がそのように望んでいるというのに？」これは、彼女自身の行為主体性の主張であり、すべての功績を神に委ねると主張する彼女の他の発言とは対照的である。彼女は折々に、個人のイニシアティブの否定と、展開する政治・宗教上のドラマにおける役割のための崇高な主張とを結びつけることができた。彼女の自伝的な著作『聖者の遺産』は、以下のように自身を定義して閉じられている——「自ら自身であることを望まず、自らを主と彼の人民のものとし、全エルサレムのために彼女は苦しみ、全エルサレムとともに彼女は君臨する——価値なき者であるとしても」¹⁶。後出のドロシー・ウォーのようなクエーカーの説教師は、しばしば独身の、不安定に自立した若い女性であり、神の道具であると同時に自分自身が重要性をもつという複雑な自己認識を示していた。

読み書き能力が経済的地位とジェンダーによって強く規定されていた社会において、読み書きができたという点でも、トラプネルはある程度まで異例である。1640年代までの識字率についての最も

¹⁶ Trapnel, *Report and Plea*, p. 28; Trapnel, *A Legacy for Saints*, p. 64. エルサレム (Sion) は、ここではキリストの聖者からなる真のキリスト教会を意味する。近世イングランドの独身女性については、たとえば以下を参照。Amy Froide, *Never Married. Single Women in Early Modern England* (Oxford, 2005).

悲観的な推定によれば、男性は30%、女性は10%が読めたという。しかし、トラプネルは彼女が「本を読み、書くことを訓練されてきた」と述べている¹⁷。上記の数値は書く能力をもとに算出されており、おそらくは低すぎである。また、都市部や急進的宗教集団内では識字率はより高かった。1650年代までに、おそらくはロンドン女性のほぼ半数が読めたといえそうだが、書く能力はより稀少だった。しかしながら、1650年代により多くの女性たちが印刷物を出版するようになり、その多くが宗教的メッセージを発した。クエーカーの女性著述家は、多くが比較的低い社会的地位にあったが、1650年代に女性が出版した全著作の半数を占めていた¹⁸。

識字率を論ずることで、私たちは文化史の領域と、トラプネルの予言者的役割のさらに別の側面に入ってゆく。ここでは女性の身体と言説に関するフェミニストの文化史が極めて重要な洞察を与えてくれる。「平時」において、女性の身体は神秘的で、浸透性高く、危険で、制御から逸脱し逃れやすいとみなされていた。これらは女性の予言の信頼性に寄与する性質であった。なぜなら、神が自らの目的のために女性の身体に影響を及ぼすこともまた、ありそうなことだったからだ。トラプネルはこの点でも複雑な例である。彼女は、彼女がヴィジョンを見るとき、「私は身体感覚を失っていました。身体の内にはいたのか外にはいたのかは、神が知っています」と言う。彼女はほとんど飲み食いせず、彼女のこの世での感覚は死んでおり、神にのみ同調していた。ホワイトホールで彼女は「見も、聞きもせず、人びとの騒音や気を散らすものを認識しておらず、神の声のみを聞くものとなっていました」。コーンウォルからの帰途、彼女には彼女の乗る馬車がガタガタいう音も聞こえなかった¹⁹。しかし、トラプネルがトランスに入る際には、彼女は神と協力した——「私は身体から抜け出すことを望みました。溶けて消えることを切望したのです」。つまり、彼女が意見を述べることのできる、あるいは彼女がヴィジョンを説明できるような自己認識の要素が存在していた。これは単純な受動性ではない²⁰。敵意ある当局にとって、トラプネルの身体は疑念的であった。コーンウォルで彼女は突つき刺されて、無感覚との彼女の主張が有効であるかが試された。彼女は魔女の疑いをかけられたのだ。魔女は、もう一つの逸脱的で危険な、そして主として女性の役割であった。魔女もまた身体に刻まれた役割であり、そのためトラプネルは「魔女を調べる女性」に魔女のしるしを探されたのだった。ここでもまた、同プロセスはイングランド〔の規範〕に埋め込まれたものだった。ローラ・ゴイングが示したように、女性の身体は「家族と国家の双方の物理的権力に従うものであり」とくに婚外子の妊娠において「それらは公的に規律化され、罰せられた」²¹。トラプネルが被った身体への攻撃

¹⁷ David Cressy, *Literacy and the Social Order: Reading and Writing in Tudor and Stuart England* (Cambridge, 1980). この議論は、とくにマーガレット・スパフォードの以下の論考によって修正された。Margaret Spufford, 'First Steps in Literacy: the Reading and Writing Experiences of the Humblest Seventeenth Century Spiritual Autobiographers', *Social History* 4 (1979); Anna Trapnel, *A Legacy for Saints*, p. 1.

¹⁸ Patricia Crawford, 'Women's Published Writings 1600-1700', in Mary Prior, ed. *Women in English Society 1500-1800* (London, 1985).

¹⁹ Trapnel, *A Legacy, for Saints*, p. 27; *Cry of a Stone*, p. 16; *Report and Plea*, p.8.

²⁰ Trapnel, *A Legacy, for Saints*, p. 27.

もまた、クエーカー女性の経験と類似性をもつ。若いクエーカーの奉公人ドロシー・ウォーは、聖俗の権威との劇的な対立ののちに身体刑にあった。彼女がカーライルの公的市場で抑圧的な支配者たちを非難したあと、彼女は同じ場所にガミガミ女の轡を頭につけて3時間立たされたが、意気消沈はしなかった——「私は、腕を後ろに拘束され、頭に鉄の重みを感じ、話せないように口枷を口に入れられて彼らが言う時間、立っていた」²²。

女性の宗教的急進派に対する、魔女と口やかましい女という罪状は、女性の言説についての長年の不安を基盤としていた。近世イングランドの理想的な女性は、従順であるだけでなく公的な場でほぼ沈黙するものであった一方で、多くの共同体において女性——とりわけ、既婚の品行方正な女性——が、その舌の力を通じて重大で非公式な道徳的影響力を行使したことは明らかである。しかし、これには限界があった。より周縁的、あるいは伝統的でない女性は、彼女たちの公的な言説が、口やかましい女の破壊的で攻撃的な言葉や、魔女の悪魔的言説として非難される危険を冒すことになった。女性の言説は女性の身体と同様に、慎重に監視されたのである²³。したがって、女性予言者の言葉は論争と挑戦に晒されやすかった。彼女たちの支持者にとって、彼女たちは神のメッセージを発していたが、懐疑論者は彼女たちが狂っているか、詐欺を行っているか、悪魔的であるとみなした。あるニュース冊子は、トラプネルのホワイトホールにおけるトランスを次のように報じた。「何百もの人びとが、日々彼女を見聞きするためにやって来た…ある者は彼女が成すことは偉大なインスピレーションによると言い、別の者は、彼女は精神に問題を抱えた者だと言うと言っている」²⁴。トラプネル自身の態度は、いつもながら複雑である。一方で彼女は、彼女の発言はすべて神からもたらされたと言う——「私が言ったことすべてにおいて、私は何者でもなく、主が私の口にもたらし、私に言うべきだと言ったのです」。同時に他方では、すでにみたように彼女自身の声で、彼女は独身の女性としてどこにでも行きたいところへ行ける、と主張したのだ²⁵。

このように、イングランド革命におけるアナ・トラプネルの複雑で曖昧な行為主体性を理解するためには、文化史、社会史、経済史、政治史、宗教史のアプローチを必要とする。私はこの顕著な女性の行動力を、他の女性による介入とも比較して、彼らを近世イングランドにおける女性の役割に関する長年の前提のなかに位置づけようとしてきた。女性の歴史は、より広い歴史と想定される「ジェンダー史」とときに対比される。しかし私は本稿で、女性の体験はジェンダー化された規範とヒエラルキーのコンテクスト、すなわち、女性がどのように振る舞うべきかや、彼女たちの男性との関係性の

²¹ Laura Gowing, *Common Bodies: Women, Touch and Power in Seventeenth-Century England* (London and New Haven, 2003), p. 5; Trapnel, *Report and Plea*, p. 26.

²² Hilary Hinds, 'Embodied Rhetoric: Quaker Public Discourse in the 1650s' in Jennifer Richards and Alison Thorne, eds, *Rhetoric, Women and Politics in Early Modern England* (London, 2007).

²³ 豊かな先行研究のなかで、とくに以下を参照。Martin Ingram, "'Scolding Women Cucked or Washed": A Crisis in Gender Relations in Early Modern England' in Jenny Kermode and Garthine Walker (eds), *Women, Crime and the Courts in Early Modern England* (London, 1994); Laura Gowing, *Domestic Dangers: Women, Words and Sex in Early Modern London* (Oxford, 1999).

²⁴ *Severall Proceedings of State Affaires*, 12-19 January 1654.

²⁵ Trapnel, *Report and Plea*, pp. 23-26, 28.

理解においてのみ理解できると示せたことを願っている。女性たちはこうした規範——とりわけ、家庭における役割についての前提——を利用して、17世紀半ばの宗教的、政治的動乱への参加を正当化した。しかし、こうした劇的な動乱は、ひるがえって、女性の地位についての伝統的な理解に疑義を呈したのである。

イングランド革命史に対するジェンダー化したアプローチの他の啓発的側面について十分に論じる時間と紙幅はない。ジョアン・スコットが30年前に述べたように、ジェンダーは歴史分析の基本カテゴリであり、社会がいかに構成されるかにおいて決定的な要素となっただけでなく、社会がいかに想像され、正当化され、挑戦を受けるかにおける中心的な要素でもある²⁶。男女の役割とジェンダー化されたヒエラルキーは、戦争と政治的動乱によって避けがたく動揺する。とりわけかつての隣人や家族を分断させる親密な対立である内戦は、個人あるいは家族に関する不安を最も鋭く引き起こし、ジェンダー化された概念とイメージを通じた対立の表象を促進するものであろう²⁷。この点は、近世イングランドにおいていっそう強く表れた。なぜならジェンダーは、政治的権威を理解する最も一般的な方法の中心にあったからである。第一に、政治的権威——とりわけ国家における君主政的権威——と家庭における権威——とりわけ父親の権威——の反響する相似にもとづく家父長的な枠組みが存在した²⁸。臣民の父とみなされる国王が、戦場で抗われ、裁判にかけられ、処刑されたとき、家庭におけるジェンダー化されたヒエラルキーにも面倒な影響があったかもしれない。他方で、男性としての国王が、外国のカトリックの妃のとりことなったとき、彼は君主にふさわしいといえるだろうか？ルーシー・ハチソン（皮肉にも彼女自身も活動的な共和主義者であった）が意見したように、「男性の君主が、外国生まれの異教の女性に国務に口出しさせるほどに女々しいと、常に哀れな荒廃を招くと知られている」²⁹。

このように、男性のアイデンティティも戦争と革命によって乱された。これは政治の家父長的理解のなかでだけでなく、第二の、かなり異なる枠組においてもそうだった。この第二の枠組は、現実的には必ずしもそうとはいえないものの、原則として公的世界と私的世界を区別する古典的モデルに依拠し、より合理的かつ自制的で公的精神をもつ性である男性にのみ公的権力を与えていた。しかし内戦のなかで、真の公務をどこに位置づけるかをめぐって深刻な不一致が生じた。現実的には、この問題は家父長的な見方と結びつけられていた。なぜなら男性の家長は、通常最も適切で合理的な政治的アクターであるとみなされていたからだ。パトニで議会軍が王国の将来について議論していたとき、

²⁶ Joan Scott, 'Gender: A Useful Category of Historical Analysis' in her *Gender and the Politics of History* (New York: Columbia University Press, 1988), first published 1986 in *American Historical Review*; また、*American Historical Review* 113 (2008) における議論も参照。

²⁷ その結果、イングランド革命期の政治論争や印刷物におけるプロパガンダに、ジェンダー化した侮辱的態度や性的中傷が傑出して現れる。

²⁸ 気まぐれな継承がブリテン王政に女性支配者を出現させたかもしれないが、それは異例であり、次善の策の展開にすぎなかった。

²⁹ Lucy Hutchinson, *Memoirs of the Life of Colonel Hutchinson*, ed. N.H. Keeble (London, 1995), p.70.

急進派軍司令官トマス・レインバラが行った、奮い立つような民主主義宣言は、イングランド革命の最もめざましいスローガンの一つである。レインバラは「イングランドで最も貧しき者であろうとも、最も富める者として生きる生がある」と主張し、政府は全男性の積極的合意を基礎とせねばならないと論じた。レインバラは、有産の男性の家長に政治的権力を限定することに反対した。彼はその過程で、家父長的家庭自体ではないものの、政治的権威の家父長的価値観に異議を申し立てた。「神の法に関して言えば、「汝の父、母を敬え」とある…私は、イングランドの人民について考えている。しかるに、彼らは統治者——すなわち彼らの^{シヴィル}国家の父母——を選ぶ声はもたない。彼らはこの命令に縛られてはいないのだ」³⁰。国家の——すなわち政治的——父母は別だったのだ。民主的な男性の政体というレインバラの要求は、大部分において、議会軍の軍役に大きな犠牲を払った全男性に対して何らかの政治的報いがあるべきだという訴えだったが、同時に、イングランドの社会的、経済的展開に呼応したものであった。これらの展開は社会の分化を促進し、男性が自立した世帯主としてヘゲモニー的役割を獲得するのをより困難にしていたのだ³¹。

このように、女性の役割と同様に、男性の役割がいかに内戦によって乱されたかを理解するには、社会、文化、経済、政治の展開のあいだの相互関係を考察する必要がある。イギリス史研究において社会史と政治史のあいだにあるとされる分裂は、広く惜しまれてきた。しかし、それはしばしば誇張されているか、政治史と社会史の双方についての過度に単純化された特殊な定義にもとづいた評価である³²。ジェンダー化の観点を取り入れた視角（gendered perspective）は、領域横断的なアプローチを不可避に含んでいる。イングランド革命期の政治的、宗教的動乱における女性の行為主体性は、複雑で長期的な社会、経済、文化のコンテキストのなかで出現した。そして、17世紀半ばの動乱は、ひるがえってイングランドの政治的、宗教的分裂のみならず、社会、経済の展開にも長期的な影響を及ぼすことになったのである。

³⁰ パトニ論争における男性性の意味については、以下を参照。Hughes, *Gender and the English Revolution*, pp. 108, 113-115. パトニ論争の史料については以下を参照。Andrew Sharp (ed.) *The English Levellers* (Cambridge, 1998).

³¹ とりわけ以下を参照。Alexandra Shepard, *Meanings of Manhood in Early Modern England* (Oxford, 2003).

³² Keith Wrightson, 'The Enclosure of English Social History', *Rural History*, 1 (1990)は典型的な表明の一つである。